

新型コロナウイルス感染症の予防とともに行う かかわりづくりワークショップQ&A

Q1. コロナ禍以降も実施していいですか？

A. コロナ禍以降、これまで学校があっでできていたことが、休校により遅れてしまっているため、生徒の学力、体力、社会適応などの成長をマネジメントすることが求められています。現在、学校では、学力や体力を取り戻そうと努力され、また、人間関係づくりが苦手な生徒がいる場合、社会的な適応（人間関係作り）も意識的に支援されていることでしょう。

かかわりづくりワークショップのコンセプトである「教員も生徒も安全に、安心してワークを行う」という点を大切にしながら、ワークの数を減らし短時間で実施しても、適応感が高まる生徒はいると思います。また、その適応感の高まった生徒が他の生徒の学びを支えることが可能になると考えられます。

ただし、原則として、学校で行っている感染症対策に準じて実施してください。

Q2. 段階的な登校再開の途中で全員が揃いません。全員揃ってから実施すべきですか？

A. 3密（密閉・密集・密接）を避けるため、分散登校などの措置をとっている場合もあると思います。その場合、距離をとってワークを行いやすくなります。必ずしも全員がそろふ必要はありません。環境や条件に応じて柔軟に行うことが大切です。この半分の人数で行うときに気をつけたいことが、生徒はその半分の集団の全てだと考えてしまう可能性があることです。したがって、教員はそれぞれにもう半分いて、全員そろっていることをイメージしましょうと語りながらスタートすることが大切です。

Q3. 情勢下の実施にあたって保護者や生徒になんと説明すればよいですか？

A. 休校明けに行うこととなりますから、ここまでで不十分であった人間関係づくりを積極的に行いたいと考えていること、そして、新型コロナウイルス感染症の終息が見えない中では、この先の学校生活でも不自由なことがあることが予想されるため、より一層人間関係づくりは必要になると考えられるため行いたいということを伝えるとよいでしょう。

実施するときは、学校で行っている感染症対策に準じて行うことも伝えます。

（資料）身体接触がない、距離をとれるなど感染症対策のとれる本書のワーク一覧

かかわりづくりワークショップは、「ほぐす、つなぐ、つくる、伝え合う」の4段階を踏まえて構成します。

緊張をほぐすワーク	関係をつなぐワーク	関係をつくるワーク	伝え合うワーク
・ジャンケン チャンピオン (本書 98 頁) ・足ジャンケン (本書 100 頁) ・カウント 77 (本書 102 頁)	・〇〇といえ (本書 110 頁)	・質問ジャンケン (本書 128 頁) ・サイコロトーク (本書 130 頁) ・アドジャントーク (本書 130 頁) ・今年の漢字 (本書 132 頁)	・いいとこ四面鏡 (本書 134 頁) ・クロージング (本書 138 頁)

Q4. ワークショップを進める際、どんなことに気を付けるとよいでしょうか？

A. 大切なのは「コロナ対策と生徒の熱中を両立させられるか」という視点です。例えば、マスクをして声を発さず実施する場合、表情もわかりにくく、笑いも起こりにくく、生徒は心理的な距離を感じ熱中できないことが予想されます。そこで、アイコンタクトをとって目じりを下げてうなづく、親指を立てて合図をするなど、心理的な距離を縮められるようなコミュニケーションの方法を用いながら指示をします。

また、意識させたい内容（活動のねらいやソーシャルスキルなど）を生徒に明確に伝わるように指示することが大切です。生徒自身が不安だとあまいなものに耐えられない可能性があるからです。スライド資料を作成するなど、生徒への指示が視覚的に伝わるように工夫しましょう。

各ワークの留意点は、プログラム例①・②および事例にある「感染症対策のポイント」をご覧ください。

Q5. 「オープニング」「クロージング」は実施しないとだめですか？

A. オープニングは、実施の意味とルールを示します。判断のポイントはこのあとのワークがスムーズにいくかどうかになります。例えば、情勢下では、通常のように実施の意味やルールを丁寧に行わなくても、生徒はすんなりとワークに入ると判断できれば、短時間ですませることも可能です。

クロージングは伝え合いの活動ですので、その目的をどのように達成できるかを考えるとよいでしょう。例えば、プログラムの最後に行わずに、回収したワークシートを教員が集約し「学級通信」として共有することで代替できると判断できれば、プログラムとしてのクロージングを省略することは可能でしょう。

Q6. 短時間のプログラムを作成する際、ワークの種類を多くすると、種類は少なくしてグループサイズを変更しながら一つずつじっくり取り組むのは、どちらが効果的ですか？

A. 一概にどちらがいいとはいえません。「生徒はどちらが熱中できそうか」「教員はどちらがテンポよくできそうか」を踏まえて検討してください。前年も実施していれば、その様子も手がかりとします。なお、新型コロナウイルス感染症対策などでプログラム全体の実施が難しい場合は、「ほぐすワーク」だけにすることを検討してもよいと思います（前頁の資料参照）。

Q7. 一つのプログラムを数日間に分割して実施することは可能ですか？

A. かかわりづくりワークショップのポイントは、ワークをテンポよく行い、生徒に熱中させ、余計なことを考えさせないというものです（詳しくは本書 60 頁参照）。したがって、プログラムの分割実施を考える際は、分割しても生徒を熱中させることができるかという視点で検討するとよいでしょう。

Q8. 3密回避のために屋外で実施することになりました。実施のポイントは？

A. 屋外は声や視線が拡散しますので、集中させるための工夫が必要です。例えば、生徒を半円の状態に座らせ、教員は半円の中心に立って指示を行い、教員と生徒の距離が極端に遠くなるのを防ぎます。教員が太陽を背にしないこともポイントです。指示している教員の顔を生徒に見せると安心感が増します。また、ポータブルマイクなど音響設備を使い、教員の指示（声）をどの生徒にも確実に届けます。使用する場合は、教員の指示が他の人（教室にいる生徒や地域の人など）に聞こえるような音量は避けたいところです。さらに、空間が広がっただけでなく、校舎内にいる他の誰かに聞かれる心配のない場所であることも重要です。例えば、中庭は他に聞かれるなどの心配をさせると思いますので避けたいほうがよいでしょう。

参考文献：

文部科学省（2020）『新型コロナウイルス感染症に対応した小学校、中学校、高等学校 及び特別支援学校等における教育活動の実施等に関する Q&A（5 月 21 日時点）』

文部科学省（2020）『学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～（2020.5.22 Ver.1）』

大谷哲弘・粕谷貴志（2020）『かかわりづくりワークショップ』図書文化

- ・本紙は、大谷哲弘・粕谷貴志（2020）『かかわりづくりワークショップ』図書文化、の追加資料です（無断複製禁止）
- ・ワークショップ実施の際は、政府や自治体が発信する感染症対策の最新情報、学校の方針を踏まえてください